
孤島の宝

空風灰戸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤島の宝

【Nコード】

N4408T

【作者名】

空風灰戸

【あらすじ】

働かない男はよい生活をしていた。その男の死後、男の持つ金庫から多くの金が見れるが、その一部は消えていた。トレージャーハントーの富浦はその宝を探すためとある町へ向かうが、そこで伝説の著名な研究者である弘田教授と出会う。そこで、教授と口論になり、その末、彼らは大津波に飲み込まれてしまうが。

第01話「新しい宝の情報」

その冒険は、まったくこんなことになるだろうとは思えないことから始まることとなる。

梅雨の終わりごろの東京のカフェは、混雑していた。テラス席にはあいにくの雨模様であるから人はおらず、みな店内の席に収まるからである。それだけいるならば、がやがやとうるさく、まったく普段の東京とまったく変わりない光景である。

その中で、夏にはまだ早いのに陽に焼けて、小麦色の肌になっている小柄な男が、まるで難攻不落の城のような表情で新聞を読みつつ、コーヒーをすすっていた。時間が昼だっただけに、その光景はいささか目立っていたが、自分たちの話に夢中で、誰もその男に気をとめるものはいなかった。

やがて、その男の正面の席に長身のやさしそうな温厚な性格を思わせる顔をした男が座った。その男が注文を済ませると、小柄なほうの男はいった。

「あなたは熊本県についての知識があるのか？」

この場にそぐわない滑稽な言葉だったが、二人とも笑うことはなく、長身の男はうなずくと、いった。

「東京都から浦安までは多少の距離がありますね」

小柄な男はうなずいた。

しばらくして、長身の男の注文した品が来ると、封筒を小柄な男に差し出した。小柄な男はそれを受け取り、封をきり中の書類に目を通すといった。

「これが、新しい場所か」

「そうですと」長身の男はサンドイッチをほおばりながら言った。「極限られた情報屋でしかまだ流通していない情報ですぜ、富浦さん。こいつは早めにいくもんですな」

「そうさせてもらっ」と富浦は言った。「それには、お前さんの準

備も早急に必要になるな、情報屋さんよ」

「もちろん、すぐにしたくはしますとも。こつちが頼んだことなんですからね、お手間を取らせるつもりはまったくありませんよ。それに、トレジャーハンターが、早い者勝ちの世界であることも私は知っていますからね」

トレジャーハンターの富浦は、立ち上がると机上に一通の封筒を置くと、受け取った封筒を無造作にポケットにねじ込み、カフェを出て行った。

情報屋の倉知は、封筒を手にとると、もう片方の手でサンドイッチを口に入れた。

何の変哲もないただの建物に、トレジャーハンターの小柄な男、富浦の部屋はある。一LDKサイズの小さな家であるが、彼にとつては広すぎるほどであった。結婚もしていないし、そこにあるものといえば、たいした物はない。パソコンはあるが、テレビはない。この家にはふさわしくないほど、家具が足りないのである。

しかし、家にふさわしくないものが別にたくさんあった。それが、金庫や南京錠である。その幅は広く、小型の普通の金庫から、大型のダイヤル式金庫、また、最新のナンバーロックがかかる金庫が部屋を占領している。初めてこの家に来たものは必ず思うだろう。

この男は正気じゃない……！

また、家の玄関には、サムターン回しを防止するものも付けているし、ほかにもピッキングされにくいようなものをたくさん付けて、何重にもしている。また、ベランダに通じている窓にもみな、不法侵入されないようにしているし、ベランダには砂利石が敷き詰められている。

この家を一言で現すと「要塞」である。

富浦は、トレジャーハンターの中では有名な人物である。それだけ有名になるには多大なる苦勞を重ねていたが、彼を有名にしたのはその宝の発見率の高さである。トレジャーハンターの中では、彼

を「スナイパー」と呼ぶものもいる。どんな標的も逃さない凄腕のスナイパー……………。

そう、彼のこの金庫の中には、多大なる宝の姿と宝の変わり果てた姿があるのである。

彼は家に入るや否や、いつも使っている冒険用のかばんを取り出し、パソコンを開き、目的地への飛行機の手ケットを二枚予約した。彼は、トレジャーハントに出かけるのである。新しい宝を求めて

第02話「同じ伝説と異なる目的」

彼らがやってきた町について詳細は記さない。しかし、東京から一時間以上はなれた場所にあることだけは確かで、それは海沿いにある町であった。

その町は決してリゾート地ではなく、ただただ港があるばかりの港町で、東京にあるようなビルはない。しかし、高いところから見れば、絶景の海景色を見ることが出来る町でもある。

そんな町にある唯一の旅館にて、富浦と情報屋の倉知は宿泊をすることとなっていた。富浦には相棒の役割を果たす人間はいない。しかし今回、情報屋の倉知が情報料を安くする代わりに、トレジャ―ハントに同行したいと願望してきたため、富浦はしぶしぶ納得せざるを得なかった。なんせ、情報は情報屋たちの間でしか広まっていない、いわばトクダネであるから、それを手に入れるには、倉知の願いをかなえるほかなかったのである。

彼らが滞在するための宿は、旧式の古い宿である。第一印象が肝心とばかりに外見はよいが、外見と比べると内はだいぶ質素である。しかし、上中下の三段階評価ならば、中に相当する宿で、そこそこの一般宿とまったくかわらぬ宿であった。部屋は、二階にあり、それぞれの部屋は違ったものの、どの部屋も形は同じである。

富浦は、荷物をクローゼットの中に入れると、階下に降りた。すると、一階には彼がメディアで見たことのある人物がいるのを発見した。

研究所でもないのに白衣を着、いかにも研究者らしい髪型で長身いささか外国人であるように思わせる鼻を持っている男。その男の名前を富浦は思いだせなかったが、並んで歩いている助手らしき男が、彼の名前を言ったことだした。

「弘田教授か」

弘田教授……この男は、神話や伝説などについての研究をしてい

る大学教授である。今まで、さまざまな神話や伝説について検証を
しており論文も出している。特に、アトランティス大陸についての
論文は、賛否両論を巻き起こし、一時時の人となったこともある教
授である。

富浦は、教授を見て何かいやな予感に見舞われた。教授は彼の横
を通り抜けて言ったが、彼は後ろを振り向きその後ろ姿を追い、や
がて教授は見えなくなった。

彼は、倉知の部屋を訪ねると、早速弘田教授がいたことを話した。
「この情報は情報屋でしか流布されていたんじゃないのか？」富浦
は問い詰めるようにいった。「あの男はこの町にある伝説について
調べているんだ。となれば、おれたちがいままさに探そうとしてい
る宝にまつわる伝説とかかわりがあることになる」

「まさか、そんなことはありませんよ」倉知はなだめるようにいっ
た。「この町には別の伝説があるのかもしれないよ」

「ひとつの町に伝説がいくつもあつてたまるものか！ あの男は必
ずこの伝説について調べているはずだ。ここまでお前さんがついて
きてくれて助かったよ。いったいこれからどうしてくれよう？」

富浦は怒りに燃え始めていた。それを感じ取った倉知はすぐさま
言った。

「大丈夫ですよ。弘田教授が探し出す前に、私たちが見つけ出せば
いいんですから」

「ふん、競争しろというのか、え？ おれらトレジャーハンターの
職業柄をお前さんはよく知らないようだな。おれらは人目をできる
限りのばなければいけないんだ。場合によっては風あたりが強く
なるからな。ともかく、この仕事はここで終了だ。さっさと東京に
帰って、お前さんからはちゃんと金を返してもらおう」

「富浦さん落ち着いてくださいな」倉知はやんわりといった。「そ
んなにあせることはありませんよ。教授の目的もまだわからない
んですし、早とちりの四過ぎかと。それに、あの人は伝説に興味が
あるだけで、宝自体には興味はないはずです。それでしたら、まっ

「たく問題ないでしょう？」

「問題はない」富浦は断言するように言った。「しかし、室に興味はないとはいえ、おれと衝突するのは避けられまい」

「まさか、衝突するのいやなんですか？」倉知は冷やかすようにいった。「天下のトレジャーハンターがねえ、そんなことは嫌うとは思いませんでしたよ」

倉知は、このままいけば戻ることはなかりと、内心想っていた。倉知は、情報屋として経験豊かな男で依頼主のコントロールについては、いささか心得ているのである。それをまさに今実行しているのだ。

案の定、富浦は怒りを爆発させつつあったが、それは別方向に向かっていた。つまり、当初の彼が言い出した方向とはまた別の方向逆の方向へ。

「別に嫌ってはいない」と富浦は弁明するようにいった。「前にもいったとおり、トレジャーハンターはできる限り表立ちたくは……」「まあまあ、大丈夫ですよ、富浦さん。とにかくやるだけやってみればいいじゃないですか。見つかるかどうかはそのときしだいですよ。それに、このまま帰ってもまったくメリットはありませんよ。こんな町にまで来て、何もせずに帰るなんて、無駄もいいところですよ」

かくして、富浦は反論を続けることはできず、自室へとしぶしぶ引き上げていった。

その夕、富浦は東京のカフェで倉知から受け取った書類を読み返していた。

その書類にはこうかかれていた。かつて、その町は津波に襲われたことがあった。海岸沿いの町であるし、津波対策はされていたがそれを越えるほどの大津波で、町全体が床上または床下浸水となり、大きな被害をこうむった。

その当時、その町には漁師ほかその妻子しかいなかったが、一人

だけ違うものがあつた。その男は漁師でもなければ働きもしない、ぐうたらな男だったが、付き合いはよい男だった。だから、この町になじんではいたが、いったいどうして何もしないのだろうといぶかしげられていた。

その男が住んでいる家は普通の平屋であり、とてもお金持ちとは思えないのである。そして、ほかの町の人々同様にかぎを閉めてはおらず、オープンであつた。

かつての大津波でその男の家も床上浸水となつた。そのとき男は町にいなかったが、ついに男は町に帰つてこなかつたという。床上浸水したその家を片付けている町のもがその家を整理していると、なんと大きな金庫を見つけたという。それは壊れており、あけてみるとそこには多大なる金があり、少しばかりの宝石があつたという。その町人はそのことを他人に話し、その家全体を搜索したが、それ以降それらしきものは見つからなかつたという。そのとき、彼らはあの男がいつも人目をしのび、少し町から外れた海岸に行つていたことを思いだした。そして、それを見た後、男が帰ってくるのは、何十日もたつた後で、大変つかれきつて帰つてきたという。

それを町の人々は、多大なる金やなにやらを隠していたのであるう、と推理したのである。かくして、その推理を確かめるようにその近辺はあらわれたが、結局そのようなものは見つからなかつたという。

そんなものはなかつた、ということが最終的に町にいきわたり、その男と宝の話はこれつきり持ち込まれなくなり、今現在となつては死語の如くの話となっている。

町のはずれの海岸……。そこにこの男は宝を隠したのは確かである、と富浦は思った。しかし、それには問題がある。当時の人々ができる限り調べたといえど、海底の奥底までは探せまい。となれば、その男はいったいどうして海底まで宝を隠すことができたのか、という疑問もある。

富浦はそれについて、さまざまな推理をしていたが、とにかく最

初にすべきことは、海底にもぐって宝を探すということであると考
えていた。

宝の数は計り知れぬが、この謎は彼を大いに奮い立たせていた。

第03話「教授」

弘田教授は、自室で一人悩んでいた。今回の謎の富豪の宝の伝説について、まったく情報が入らなかったからである。伝説というものは、町の人たちに広がっているものであるが、この町でその伝説について知っているものが、いないのである。少なくとも、彼が今尋ねた人たちの中には。それも、尋ねた人はほとんど年配の人物であるので、知っていそうなものにもかかわらず、だ。それに調査は、すでに一週間を経過している。それなのに情報が皆無となれば、根気強い教授も参ってしまうのである。

教授は、たまされたか、と憤りを感じながら思った。彼はその手紙を受け取ったときのことを思いだしていた。

それは、三週間前のことである。いつものように、大学で講義をし、家に帰ったとき、彼に手紙が来ていたのである。いまだき手紙が来るとは、と不思議に思いつつ封筒を逆さにしてみたが、そこには何もかかれていなかった。彼は不審に思いつつも、それを開封し、手紙を読んだ。

その手紙は形式どおりに書かれており、内容を要約すると、弘田教授が今来ている町に検証されていない伝説がある、と書かれており、それを調べてはどうか、ということだった。

教授は伝説の解明などに、情熱を注ぐ人物である。彼はできる限り都合を整えて、現地に飛ばうと決心したのである。そして、その結果がこれだ。憤るのも無理はない。所詮、ガセネタだったのだ、とだけで解決する問題ではない。

しかし、三週間を予定していたので、彼はまだ二週間滞在する期間があった。切り上げることもできるが、天下の弘田の名譽にかけても退くわけにはいかなかった。

結局、教授はあと一週間は最低でも滞在しようと心に決めた。

まだ若い手塚は、弘田教授より少々背が低いものの、世間一般から見れば長身の男で、顔立ちは大分整っている。目は大きく開かれ、いささか無邪気さを感じさせる男である。

教授がこの町につれてきた唯一の助手である手塚は、教授がすぐに引き返すのではないかと不安だった。調査が失敗に終われば、教授は大いに荒れるであろう、と考えてしまうのだ。荒れてしまうと、講義にも支障ができることもあるのだ。彼はそれを避けたかった。それに彼は教授を尊敬している。教授が失敗するのをみたくない、というのもあった。

とにかく彼は、教授にこのまま帰ることのないよう説得する決心をした。尊敬する教授にこんなことをいうのは失礼かもしれないが、このままでは尊敬する教授に傷がついてしまう。

しかし、彼が乗り込んだとき、教授はすでに一週間滞在しようと思心に決めた後のことだった。教授は、笑いもしないが怒りもせず、彼に言った。

「心配はしなくてよい。まだ、調査はちゃんと続けるから。まだ二週間もあるわけだし、何かしら得られるかもしれない。なに、伝説の検証には大分時間を要すのだ。この伝説についてがガセネタでなければ、ちゃんと見つかるだろう」

「それならいいんですが……。にしても、ガセネタだったらひどい話ですよ。いったい誰がそんなことをたくらんだのか……」

「まだガセだと決まったわけではないがね。とにかく、手塚君。心配は無用だよ。とにかく、明日からもちゃんと調査をするからな。そのことは、夕食のときにでも話そう。そろそろ、夕食時であるしな」

と、そのとき彼の部屋に仲居がやってきた。彼の部屋に夕食が運ばれてきたのである。手塚はいったん自分の部屋に戻り、また手塚の部屋に戻り食事をすることにした。彼の食事は、教授の部屋に運ばれるように手配されており、彼は教授の部屋で夕食を取るのである。

とにかく、手塚は安心をした。そして、教授も手塚の説得を聞き、また明日がんばろうという気になっていたのだった。

第04話「情報の違い」

翌日、富浦は町外れの海岸にいた。身なりは、ウエットスーツを着ており、酸素ボンベも背負い、海の中へと飛び込んだ。

彼の目的は言うまでもなく、宝の搜索である。海の中を搜索するには、ダイビング用の準備をするのが一番楽な方法である。富浦は、ダイビングはお手のもので、ほかにロッキクライミングもできるし、トレジャーハントのためならほとんどのことを習得していた。

ダイビングした後の海岸には、ただただ倉知が取り残されるばかりだった。彼はしばらくの間、海をじっと見ていたものの、ついに眠りに落ちた。その間にも、富浦は搜索をしていたが。

海の中は比較的綺麗だった。あまり人も訪れないのだろうか、汚れてはいないし、ちょうどこの場所には黒潮がぶつかったりしないのだろう。寸前のあたりとまではいかないが、ぎりぎりのところでそれが届かないしかった。その分、魚たちが泳いでいるというわけでもなく、ただ岩と砂だけが見えるだけの海。岩と岩の間には溝がある。水深は三十メートルほどだろうか。

彼はその近辺の岩の溝をみて回った。この場所で宝を隠すには、そこしか隠し場所が見当たらないからだった。しかし、上からゆっくりと丁寧に探していくものの、宝らしきものすらも見つからなかった。

それは彼も承知していることであつた。ここに隠したなら、なぜかつての人々が探し出せなかったのか？ その男はどうして何十日もたってから帰宅し、つかれきっていたかの？ これらのことが宝に結びつきそうなものの、いったいそれが何を示しているのか、彼には検討がつかなかった。

彼は最深部を一番丁寧調べてみた。かつての人々が探し出せなかったとなれば、最深部であり、長い間いられないこの場所が一番適任だと思われたからである。しかし、そこに宝及び宝らしきもの

はまったく見当たらなかった。

その作業は、午前中だけで済んでしまった。彼らは旅館に戻り、よい料理屋を教えてもらい、そこで昼食を取った。

「どうも、この宝の行方はわからないな」富浦はその席で言った。「疑問点がそれに多すぎる」

「どんな疑問点ですか？」

彼は前述した疑問を取り上げた。

「特に、何十日もたつて疲れきつて帰ってきたということだ」と富浦。「いったい何をしたというのだろう？　まさか、海岸に何十日もいたわけではあるまい。しかし、それではいったい何をしていたのか説明ができなくなる」

「修行でもしていたんじゃないですか？」倉知はそばを音を立てて食べた後いった。

「それもひとつの説か。だが、そんなことをするとは思えんな」

富浦もそばを口に入れるとき、店の扉が開いた。富浦は扉側に向けて食べていたため、顔をあげると入ってきた人物の顔を見ることができた。

入ってきたのは、弘田教授と助手の手塚だった。その姿をみたとき、富浦は早いことこの店から出て行ったほうがいいと思った。

その矢先だった。突然、倉知は言ったのである。

「しかし、ねえ、本当にあるのかも疑わしくなって来ましたね、その伝説みたいな話は。私はかなり信頼性があると思っていましたんですが、さすがにこんなだとそうも思えなくなりますね」

それはあまりに不意にだったため、富浦は押さえに入るわけにもいかなかった。富浦は内心、この馬鹿やろうと倉知をののしっていた。

富浦が心配していたことが起こった。案の定、その話を聞いた弘田教授は、倉知にその話はいつたいどんな話だね？　私はこういうものだが、と名刺を出しながら尋ねてきたのである。

これにはさすがに倉知も動揺を隠し切れないようだった。富浦に

助けの視線を送るが、もうこうなつては後の祭りである。どうしようもない。

富浦は、倉知が持つてきた情報を教授にただで教える羽目になった。教授はそれを聞き、いかにもうれしそうにしていた。富浦には、その様子が癪に障り、憤りを感じていた。

「なるほど、なるほど」と話が終わると教授は言った。「まさか、君たち若い人たちにそんな情報が聞けるとは思いもしなかったよ。そうか、町外れの海岸にか。なにかあるかもしれないな。その男の人に関しても」

「弘田教授」と富浦はいった。「実は、おれ いやわたしたちもその伝説について調べているんです」

その嘘にいささか驚いた倉知だったが、特に何も口出しはしなかった。

「ほう、そうだったのか。それなら知っているはずだ」教授はさも感心したようにいった。「どこの大学だね？」

「いえ、わたしたちは教授のような身分ではなく、ただ調査をしている個人のものです。さすがに個人の力では限界もありますし、この伝説についてはかなり深いところまであるようなので、もしよろしかったら、教授の調査状況を教えていただいたりできれば、と思うのですが……」

「いいですよ」教授は快く承諾した。「いずれにせよ、世間に知られるんですし、あなた方に教えてもかまいません。あなた方は、どちらにお泊りで？ それにお名前はなんというんですか？」

富浦は、倉知の分も含めて自己紹介をし、教授と同じ旅館に泊まっている旨を告げた。それに付け加えて、教授と廊下ですれ違ったことも入れた。

「では、富浦さん、調査状況はちゃんとお知らせしますよ。もしよかったら、あなた方の調査状況に進展があつたら教えていただきたいのですが」

「かまいませんよ。それでは、わたしたちはここで。倉知、行くぞ」

富浦と倉知は、店を出て旅館に戻ることにした。

彼らが出て行くと、手塚は言った。

「よかったですね、有力な情報が入って」

「そうだな」と教授はうれしそうに言った。「これを食べたら、すぐに新しい情報の調査に行こうじゃないか。いよいよ、明かりが見えてきたぞ！」

旅館に戻ると、早速倉知は富浦からお叱りを受ける羽目となった。「で、これからどうするんですか？」ほとぼりが冷めたころ、彼は言った。

「もちろん続ける」富浦は即答した。「あんな野郎に、宝を手に入られてなんかたまるものか。そのためにも、ちゃんと手はずに打ってある。あの馬鹿な教授は、調査状況をおれらに教えてくれる。それなら、出し抜くこともできるかもしれない。とにかく、ここに残る。そして、宝はしっかり見つける」

富浦はそう言い放つと、部屋を出て行った。倉知の表情には、いささか微笑が含まれていた。

第05話「いざこざがもたらした事」

弘田教授のその後の調査は、順調に事が運び始めた。これまでの調査の結果をもたらしした人々に、再度話を聞き、新しい情報について触れると、いささか知っている人物がいたからである。あまりに引き出さない記憶だったために、急に聞かれても思いだせなかったらしい。

しかし、その話からわかったことは、彼の新しい情報の裏づけであるのが多かった。つまり、更なる新事実は見つからなかったが、ついにその男の家であった場所を探し出すことに成功した。

家は空き家だった。畳が敷かれているところを見ると、一時期は新しい入居者が現れたようだが、その入居者もいなくなり、そのまま放置されているらしい。鍵があいていたので、中に入り、畳を上げたりおかれていた家具の引き出しをあけたりして、何かしらの情報を得ようとしたが、それらしきものはまるひとつなかった。

時はすでに夕暮れだった。彼らは旅館に戻り、調査は明日に伸ばすことにした。

教授と手塚は、富浦と倉知と共に夕食をとることになった。その話を持ちかけたのは富浦であり、彼は新しい情報が得られたかどうかをしきりに聞いたがった。それに答えるかのように、教授は話をしたものの、それは情報の裏づけでしかない旨を最初に付け加えて話した。

しかし、彼にとっては、その男の家であった場所を見つけたというのは新しい情報だった。その家に何かならうとも、それは新しい事実に変わりはないのである。富浦はその家を、調べようと心に誓った。

翌日、彼は家を訪れた。町外れの海岸からは、大分離れており、低地にある家で、低いところからではあるものの、海を見渡すことができる場所だった。この日は天気がよくなかったこともあり、波

は荒れていた。この分では、海の中の搜索はできまい。

「消えた宝の謎……か」富浦はポツンといった。

すると、家の中から倉知が出てきたので、彼はどうだった？ と尋ねた。倉知は家の中の搜索を命じられていたのである。

「何にもありませんね、これといったものは」と倉知は答えた。

「そうか」富浦はうなずいた。「なら、帰るぞ」

倉知は驚き、その場に立ち竦んだ。富浦は、彼に背中を見せ、旅館のほうへと歩いていく。

倉知は、いったいどういうことかと彼に話しかけると、彼は答えた。

「おれたちがやることはもうない。後は教授が調べることだろうしな」

しかし、弘田教授の調査はさほど進展していなかった。彼は、町外れの海岸に来ていたが、富浦同様に何も発見することができなかったのである。その調査の結果を聞き、富浦が落胆したのは言うまでもないだろう。

それから、数日間、富浦と教授の調査の甲斐もなく、それ以後の進展はなく、また、宝の「た」の字も出てこないのであった。

そんなある日の夕飯時、彼らは共に食事を取っているときだった。「まったく、いったいこの伝説は本当の話かもわからん」と教授はこぼしていた。「富浦さんたちの情報があつてから、事は進展したかのように思えたが、まったく進みません。もしかしたら、私のところにあの情報を送つたのはあなたたちなんじゃないかね？」

「誰がそんなものを送るのですか」富浦は最近の調査の結果からいささか苛立っていた。「いったいどうして、教授たちにそんな情報を教えないならないんです？」

「そりゃあ、私を恨んでいればやるだろう。いい気味だ、といって楽しむどころのあほもいるぐらいだからな」

「そんなあほとかかわりあいがあるとは、教授も変わったご身分ですな」あざ笑うように富浦はいった。

「富浦さんみたいに凡人じゃないからね」教授は言い返した。

「おれが凡人だって！」教授の言葉に富浦の苛立ちは、一気に上昇したらしい。彼は、敬語というものを忘れてしまったらしい。「ふん！ おれが凡人なら教授はそれ以下だ」

さすがに、この言葉に教授は怒りをあらわにした。ついに、富浦と教授は口論をはじめ、食事どころではなくなり、倉知と手塚は二人の仲裁に入らなければならなかった。しかし、二人が入っても二人は口論を続け、ついに仲居さんたちが入り口に集まり始めたのである。すぐに支配人がやってきて、彼らの仲裁役が一人増え、富浦と教授は引き離されたのである。

しかし、最後に富浦は言つてのけた。

「あんたより、おれは先に謎を解き明かすからな！」

口論の翌日はあいにくの雨模様で、海も大分荒れていた。しかし、前日の口論の苛立ちや謎を先に解くといった原因である自信から、彼は町外れの海岸を再度調査することを決めていた。

それを倉知は必死でとめようとした。この海では、危険にさらされるし、調べるに調べられないというのが、富浦はまったくそれに耳を貸そうとしない。

「こんなときだから、わかるかもしれないだろうよ！」と彼はそれを話の合間によく主張した。

倉知はいやが何でも否定した。彼は怖かったのだ。死と隣合わせになることなど……それに富浦に死なれては　はたまた行方不明になられては困るのだ。

そんな気持ちはまったく知らず、富浦は自分の主張を断固と続け、結局、倉知は彼と共に町外れの海岸へ行くことになってしまったのである。

海岸沿いには、波が押し寄せ、町外れの海岸に着くまでに彼らは大分ぬれてしまっていた。このとき、富浦はまだ普段着のままであった。ウェットスーツに着替えるのは、海岸沿いにあったちようど

よい場所を着替えるのである。

町外れの海岸沿いは、時々大きな波が来ると、そこにいる人々を飲み込んでしまうというほどの大波が、起こっていることを岩が示していた。倉知はそれを見て、後ずさりしたが富浦がそのまま行くので、彼は仕方なしに彼についていった。

しかし、富浦はそれを後悔するような結果を生み出した。なんと、町外れの海岸にはすでに先客があり、それは弘田教授とその助手の手塚だったのだ。まだ一日もたっていないときに口論をした、彼らのそのときの出会いはいいものではなかったし、重苦しい空気がただよい倉知と手塚は気まづくなった。

「いったいどうして、お前がこんなところに？」と教授が怒りを隠そうともせずいった。

「ふん、それはこつちのセリフだ」と富浦。「それにいったらう。おれが先に謎を解き明かすとな」

「そんなことが、お前みたいな素人にできるかな、え？」

「できるとも。おれは、あんたよりもつと優秀な経験もつんでいるし、データベースだってある。あんたみたいな、貧相なデータベースは持っていないし、確実な情報がなければ来ることはない」

倉知と手塚は、その仲裁に入る覚悟をしなければならない空気が漂い始めていた。

そのときだった。まるでトラックが近づいてきたときの音のようなものが聞こえ始めたのである。彼らは、口論すらもやめて、その音のする方向　海をみた。

大津波が、やってきていたのである。何メートルあるか、まったく想像もできない大津波が。

彼らはそれをただただ見、逃ることすらできずに、その大津波につれさらわれていった……………。

第06話「孤島」

青い空、白い雲……………絵に描いたような光景が、広がっていた。海は穏やかで、海岸には穏やかに波打つ。陽射しが強く、太陽はギンギンに輝いている。海岸沿いには、気持ちがいいほどの海風が吹いていた。

白い砂が広がる海岸……………その砂浜に富浦はいた。しばらくの間、彼はそこでうつぶせのままだったが、海風に促されるかのように、目をゆつくりと開いた。彼は、今いったいどんなことが起きたのか、そして、いまだどこにいるのかまったく理解ができず、ただただ周りを見渡していた。

周りは、砂浜が広がっており、一番先のほうには岩が並び磯となっているようだ。波に侵食されている、大きな岩のようなものも見える。それは両端ともで、正面は海、その反対は、木々が生い茂る森のようなものが形成されていた。とはいえ、それほど深くないようで、陽射しによって森の中は照らし出されていた。

「そうか。おれは波につれさらわれてたんだ……………」

彼の脳裏に、あのときの出来事が思いだされていった。弘田教授と口論になり、大荒れの海を調べに出かけたこと。調査に行ったとき、弘田教授と出会い、また口論となったこと。波につれさらわれたこと。

そこで、彼は教授や倉知たちがどうしたかを気にし始めた。彼がいまいる砂浜は、砂浜の中央付近である。ならば、ほかの三人もここに漂着したに違いないと考えたのだが、その砂浜に三人の姿はなかった。

とにかく、彼は海岸沿いに歩いて行くことにした。彼は確信を持ちたかった。この島が無人島でないということ。

両端が岩になっていて、その先は海になっている。つまり、彼がいるのは島であるというのは疑いようがないことである。つまり、

島に漂着したのも火を見るより明らかな事実であるわけである。しかし、漂着してもそこが無人島であれば帰る手段はまったくないのだ。もし、無人島であればただただもがき苦しむのみ……苦しいサバイバル生活を送らなければならないのだ。

彼は常に単独行動を取り、仲間というものを持たなかった。とにかく自分のことは自分でやる、それがモットーだった。だから、彼は友人たちのことなど眼中になかった。それに、彼はどこにいるかもわからない友人たちのことを考えるなら、脱出手段を講じるのに考えめぐらせようとしていた。

島はそれほど大きな島ではなかった。屋久島の四分の一ぐらいであろう、と彼は思った。車を使えば、十五分ほどで回りきることができる、その程度の島だった。その島の沿岸部には、人というよりも舗装道路もなかった。ただ、見えるのは海と砂浜、岩、木だけといても過言ではないほどだった。

彼は森の中に入り、島の中心部に入っていた。森には、たくさんの虫がいて、中には危ない虫もいることに気がついた。彼はそれらの虫をよけつつ、奥へ進んでいくと、突然森は開けて、目の前に大きな池が姿を現した。

直径百メートルほどの池で、中の水は黒くにこっているようだった。到底飲むこともできまい、と彼は思った。

彼はその池を越えて、島を横切る形で、再度海岸へ出た。彼はその調査を持って確信した。ここは無人島だと。現代社会から隔離されている、と。

彼は海を眺めた。水平線のかなたに見えるのは、ただただ海のみ。島はおろか船すらも見えぬ世界。無人島に取り残された、まるで小説の中の世界のような……………。

そのとき、何か声が聞こえてきた。富浦は幻聴だと思って聞いていたが、どんどんとその声が大きくなることから、彼はそれが幻聴でないことを悟り、声のほうへ振り向いた。

声の主は倉知だった。

「よかった！ 生きていたんですね」と倉知はうれしそうに言った。
「お前もここに漂着したのか」富浦は冷静にいった。「お前、どこにいたんだ？」

「島を探索していたんですよ」富浦の態度に、憤りを感じた倉知はふてくされたようにいった。

富浦は、すぐに彼と入れ違ったように島を調べていたことを悟った。

「弘田教授と手塚とは会わなかったか？」

彼は首を振った。

「それより、富浦さん」と倉知。「この島から脱出する方法を考えませんか？ いつまでも、こんなところにいてもしかたありませんよ」

「それはそうだがな、倉知。まずは、食べ物を探さなければなるまいよ。脱出方法を考えるのに、いたいどれくらいかかるかわからないんだから、食料調達は先にしておくべきだ。それに水分調達もな。夜になつては、こんなこともできないからな」

「でも、そんなことをするより先に考えて脱出したほうがいいような気がしないでも……」

「馬鹿なやつだな、お前は」倉知の言葉を富浦が遮った。「脱出方法ができたとしても、いったい何日かかるかわからないんだから、食料調達は欠かすことのできないことだ。つまり、先にやるべきことは食料調達だ」

倉知はその富浦の考えに同意せざるを得なかった。彼の考えには一理　いや、それ以上あるわけであると、彼もすぐ理解したのである。

かくして、彼らは再度森の中へと入っていき、食料を探し始めた。とはいえ、こういうときはほとんどいつて見つからないものである。木はたくさんあるが、実がなっている木は全体の二割にも満たない。それに、ここは南国でないし、ヤシの木はないのである。しかし、こんなときへこたれるわけにはいかない。へこたれたらそ

れは、二つのことをあきらめるといことになるのだ。

彼らは森を抜け、大きな池にやってきた。相変わらず黒くにぐつていたようだ。

「最悪の場合」とそれをみながら富浦はいった。「この池の水を飲むことになりそうだな」

倉知は身震いした。こんな水を飲むだって！ そんなことできたもんじゃない。どこかの芸人じゃあるまいし、そんな芸当はしたくない。

ところで、彼らが池を後にしたとき、向かっていた方向は富浦が調べているときに通ったときの道とは異なっていた。最初、彼が調べるために通ったのは、いわば西から東であったが、今、彼らが歩いている場所は南から北だった。そのため、彼ら調べたときは見つからなかったものを、彼らは見つけることとなった。

池から数分しか歩いていない場所で、彼らは前方に何か建物らしきものがあるのを発見したのである。富浦ですら期待の微笑をかもし出すほどの発見で、彼らはその建物に近づいた。

建物はブロックのような石でできた家みたいなものだった。石はにぎった灰色をしており、綺麗な灰色の姿は何世紀も前のことと思われる。さほど大きくはないようで、二メートルあるかぐらいの高さである。

この家の外観はそれしかなかった。彼らは入り口となるようなものを見つけ、中をのいた。そこに誰かいたかと思うと、それはすぐ外に出てきて、彼らの前に姿を現した。

「弘田教授！」中をみた富浦は声をあげていった。「それに、手塚さんもか……」

「ふん、お前たちもここに漂着したのか」ぶっきらぼうに教授は言った。

「それはこっちのセリフだ」

こんな状況下に置かれても、彼らは文明世界にいるときのように、けんかが始まりそうだったので、倉知と手塚は、いまこんなところ

でけんかをして仕方がないいい、彼らを抑えた。

「仕方ないな」と教授。「ここは、いったん協定を結ぼうじゃないか」

「協定？」と富浦。

「この無人島から出るまで、争わないという協定だよ。それに加えて、ここを出る方法というのも一緒に考えるのだ」

「いいだろう」

そういつて、富浦は手を差し出し、教授はそれを握った。

「さて、教授」と富浦は続けた。「だったら、早いところ食べ物と飲み物を探そうじゃないか。あんたもわかるだろう？ 何よりも先にそれをしなければならぬ意味が？」

「わかるとも。だが、それは今日の分だけならやる必要はあるまい」
そういつて、彼は手塚に目配せし、手塚は建物の奥から食べ物を持ってきた。

「仕事が速いな」感心したように富浦はいつた。「しかし、水はどうする気だ？」

「お前さんはみなかったのか、あの池を？」

「池なら見たが……まさか、あの水を飲むわけじゃあるまい？」

「飲むんだよ、馬鹿ものが」

「あんな、汚い水が飲めたものか！」

教授はそれを聞き、にやりとし、勝ち誇ったようにいつた。

「じゃあ、お前は知らないのか。あの池の水が綺麗な水であることを。あの池の中は、真つ黒な岩が並んでいて、それが外からみるとにごったように見えていることをお前はわからなかったようだな」

これに、富浦は反論することはできなかったのはいうまでもない。そんなことはまるつきし気がつかなかったのだ。彼は、唇をかみしめなければならなかった。

しかし、これによつて、彼らは水の確保に成功し、当分の水分に困ることはなくなったのだ。後は、後々の食料調達のみであるとなると、倉知はうれしくなるばかりだった。

第07話「サバイバル」

彼らは話し合いによって、当分は彼らが今いる建物を家とすることに決定した。幸いにも屋根もあるので、風雨をしのぐこともできるし、池に近いという利点もあるから、絶好の場所である。

それを決定すると、次は島の脱出方法に関する議案が始まったが、これといった名案は出てこなかった。

いわゆるいかだ作成説に関しては、少なくとも今現在では無理な話だった。なにせ、いかだを作る材料があっても、いかだを作る術がないのである。そうなると、次に出てくる案といえば、漠然としたものばかりで、いったいどうしていいのか途方にくれる。

やがて、日が暮れた。あたりは急に暗くなり始めて、明かりが必要となった。これに関して準備をしていなかった、富浦と倉知だったが、またしても教授と手塚はこのことについても考えており、火おこしをすることのできる道具を集めておいたのである。それに、手塚はライターを持っており、このままでは使えなくても、油の要領で火をおこすのをサポートした。

三十分の格闘の後、ついに灯がともることとなった。以外にも、手塚は火おこしを得意としていたことが幸いしたのである。彼は伝説などに興味を持つと同時に、原始的なことにも興味を持っており、その一個として火おこしを習得したという。

夕食をしている間、彼らは終始無駄話に花を咲かしていた。こんな状況だから、食事のときぐらい楽しい話でもしようじゃないか、という一般的な考えだったのである。しかし、この会話に富浦はほとんど参加しなかった。彼は、こんな雰囲気でする事がなかに等しかったから、なじめずにいたのである。

彼は孤児ではないが、高校を卒業した後、トレジャーハンターとして、また、冒険家としての生活を始めたのである。彼が言うように、トレジャーハンターは人目を忍ぶものだという考えを持って

いるため、食事は常に一人だったのだ。

やがて、夕食も終わり、少し議論を交わした後、彼らは就寝することにした。布団や毛布の類はないから、彼らはそのまま地に寝そべり、眠るほかなかったが。

静寂が訪れた。それは真の静寂だった。まるで何も聞こえない……まるで地球が滅びたかのように。時が静止してしまったかのように。その静寂は、誰をもこの世に一人しかいないと思わせた。いま、自分は地球にいる唯一の人間なのだ。それは、この世の神になったという唯一の人間ではなく、誰もおらずに不安に駆られる唯一の人間だった。

恐怖……それが、感ぜられた。特に教授に関してはふるえが止まらない。耐え切れない静寂……息苦しい静寂……恐怖の静寂……。

ああ！ こんな恐怖を感じるならいつそのこと……。

静寂は保たれていたが、朝日の陽射しがかかれば話は別だった。陽光に照らされ、目を覚ました教授と富浦は、恐怖をまったく感じなかった。新しい一日が始まったのである。

彼らは簡単に朝食を済ませた後、食糧調達に出かけることとなった。何かあったときのために、二人一組ということになり、ペアは彼らがもともと連れているペア　富浦と倉知、教授と手塚　になった。

島内は、昨日調べたままであり、食料らしきものはあまり目に留まらなかった。しかし、目を凝らせば葉の影に隠れている実が見つかるし、雑草かと思えば、食べられる食材だったり、収穫は以外にも多かった。ちなみに、文明世界にあふれている食材はまるつきはなく、野菜類に関しても同様だった。

食料調達はその日の分のみしか行わない、ということも決めていた。理由は簡単に説明するものばかりだが、適切な保存方法を取ることもできないのに、収穫しては腐らせてしまい、食料を減ら

すことになりかねないからである。

食料調達が終わると、富浦と教授は議論の世界に入り込み、夕暮れ近くなると海に出、魚を釣る試みをする。なにも、彼らは菜食主義者でないから、肉は無理にしても魚肉を欲したのだ。

あたりが暗くなり始めると、すぐに釣りを終えて、家へと戻り、夕食となる。その後は、また議論となり、脱出方法の考案を始める。彼らの生活は、このサイクルで回り続けていた。

第08話「気になる石碑」

漂流してから、四日目。いぜん、議論は進まず、また、いかだ作成案も通ることなく、今日もまた食料調達をしなければならなかった。

富浦と倉知は、その間、いつもと違う場所で食料調達をしていた。それは、前にとっていた場所ばかりとってなくなったとき困らないための措置だった。分割して取ればすぐはなくならないし、片方が渴枯したときもう片方から取ればよいとなり、食料に困らなくなるからである。

彼らはその食料調達の方法の一環として、幾分高地になっているところまであがっていた。階段らしきものはまったく存在しないため、いまだ誰もあがっていない場所だったので、何か変わった食料が手に入るかもしれないと考えたのが、きっかけだったのだが、それはある意味ではあたっていった。大変な思いまでして上った彼らが、そこで見したのは界隈と同じ木々に囲まれた森のような場所だったが、ここではひとつだけ違うものがあつたのだ。

それは、石碑と地下への階段だった。

箱のふたをあけたような形のその階段と石碑。階段は、葉に覆われて、階段を隠すようにしていたが、かきわければ階段はすぐその姿を現し、石でできた階段があつた。奥は真つ暗で、どうやら地下に続いているらしい。いったい中がどうなっているのかは、まったくわからない。

石碑は四角形で立てられており、だいぶ古くて汚れていた。角は角ばりを失い丸みを帯び、全体的に岩が削られていた。石碑の表面には、文字が彫られており、どころどころ削れて読めない箇所が多数あつた。

「階……下りた先……我……が眠……」富浦は読める範囲内で、石碑の文字を読んだ。

「これはいったいなんなんでしょうね？」と倉知は意見を求めた。
富浦は、その質問には答えず、とにかく食料調達をすることを求めた。

家に帰ると、富浦はこのことを教授と手塚に話した。これに倉知は驚いたが、教授は彼よりも驚いた。何か胸に一物あるのではないかと、疑うほどだった。

「それで、その階段の先には何があると思う？」と富浦は教授にいった。

「わからんな」と教授。「しかし、『我』といっているぐらいだから、個人の私物があるように思うが……まあ、『我』が個人とは限らないんだがね。私が調べた伝説にも、『我』が私の私物か何かのことだと思っていたら、『我』は悪魔のことで、魔物がすむ洞窟だったというものがあつたからな」

「でも、この世に悪魔なんて……」と倉知。

「なめてはいけない」教授は倉知をたしなめた。「かつて悪魔は本当に実在したんだ、と私は考えている。少なくとも、私たちが想像している悪魔でなくて、ヒトラーのような独裁者のような悪魔は存在したはずだ。それこそ、頭の切れ者で、人の心理が手に取るようなものがいたはずなのだ」

「人なら、あんなところにはいないでしょうよ」倉知は反論した。

「そうだろうがね、君。幽霊という存在もあるんだよ。幽霊は天使だったり悪魔だったりするんだ。あそこがもし墓場ならば、悪魔の巣窟といっても過言ではあるまい」

「ではあんたは、あそこが悪魔の巣窟だと思うんだな？」富浦は話を戻した。

「『眠』という語からも、墓場をイメージさせる。断言はしかねるが、大方そんな類のものであると思う」

富浦は、あまり納得していないようだった。彼はひとりで考え始めたが、それを教授は妨害し、いったいお前は何を考えているんだね、と尋ねてきた。

「いや、なんでもない」富浦は答えた。「しかし、墓場ができるほどの人がいたのに、いったいどうしてここは無入島になってしまったんだ？」

「そんなことはさらにあることだ」と教授。「繁栄地だからといって、人がいなくならないとは限るまい。頂点に立ったものに残されているのは、下落のみだ。頂点から上にあがることはない」

「じゃあ、人がいたということを仮定しよう。だったら、この島のありさまをどう説明するつもりだ？　人がたくさんいたなら、もっとたくさんの家らしきものがあつていいはずだ。それなのに、これひとつだけしか、今現在見当たらない。おかしいとは思わないのか？　まさか、原始人のように、竪穴式住居みたいなのに住んでいたとはいうまい？　こんな建物があるぐらいだからな」

「だったら、お前はあの地下への階段を何だと思ってるんだね？」

「それはわからん」富浦は白状した。「しかし、墓場のようなものではないと思う。理由はいったとおりだ」

「そんなに議論するなら、行ってみればいいじゃないですか」富浦と教授の会話に割り込んできたのは、手塚だった。「百聞は一見にしかずですよ」

「それはそうだがね」と教授。「いったいどうやっていくというのだね？　地下なんだから、中は真っ暗だ。ろうそくのようなものがないのだから、何があるかもわかりやしない。触覚だけで、すべてを見極めろというのは無理がある話だよ」

「ろうそくの代わりになるようなものを、探せばいいじゃないですか」倉知は提案した。

「そんなものが今まであつたのか？」と富浦。「あつたなら使えばいい。しかし、なかった」

「じゃあ、こうしようじゃないか」と教授。「お前がいうように『あつたら使えばいい』。しばらく日をおこうじゃないか。この謎の地下への階段の調査をな」

それから数日間、島からの脱出議論の主演ともいうべき二人

富浦と弘田教授　の脳裏に別のことが入ったことによつて、脱出議論は進まなくなった。主要な二人が、案を絞らなくなったことから、二人に劣る残りの二人　倉知と手塚　は途方にくれるほかなかった。

そのことから、とにかく彼らの脳裏にあることを排除させることが必要だと感じた、二人は排除させる唯一の方法である、中の調査に必要なろうそくの代わりになるものを、探すことにした。それは、二人の間で成立し、食料調達のとくにやることで、合致した。

実は、それが成立したとき、すでに富浦と教授はろうそくの代わりになるものを探していた。彼らは、今すぐにでも地下の謎を解決したかったのだ。その謎は、トレジャーハンターの勘と興味といくつもの伝説の検証をしてきた教授の興味をそそるものだったのだ。

彼らはついに必死になつて、ろうそくの代わりになるものを探すこととなつた。とにかく、謎を謎のままにしておくのは気が進まないし、脱出議論も進まない。そうなつたら、やることはひとつに決まってしまうのだ。

必死になつてやると、案外に簡単に見つかるものである。彼らは、ついに太い丸太のような木を三本見つけたのだ。これを、手ごろな大きさに切り、葉などにくるみ火をつければ、立派なろうそくとして機能するだろう。

丸太は四等分され、計十二本の「ろうそく」が作られた。

「これだけあれば十分だろう」と富浦はいった。「まさか、そんなに長い地下道じゃないだろうからな」

「私の墓場説だったら、長いはずなんだがね」と教授。「まあいい。お前の話は筋を通して。いったいどっちが正しいかなんてことは議論するまい。どうせ、すぐわかることだ」

かくして、彼らはたくさんの葉を集めた後、ついに地下への階段へと足を踏み入れたのである。

第09話「豪華なプレゼント」

階段の幅は広いとはいえぬが、一人が通るには十分すぎるほどの幅が取られていた。壁となる部分は、みな土になっており、階段だけ岩を積んでこの階段は作られたらしい。そのため、岩にはたくさん土がまつており、土を踏まずに歩くことは不可能なほどである。

そんな土の壁に手をつき、体を安定させながら階段を下りていった。先頭は、富浦で、その後ろに倉知と手塚が続きしんがり、弘田教授が務めた。

各人それぞれが、二本の「ろうそく」を持ち、実際に火がついているのは富浦が持つ一本と教授の一本だけだった。しかし、それだけでも十分地下道内は照らされ、十分見通しが利いた。

地下道は、前述どおり壁が土でできており、それは天井から何まで階段を下りた後はそうだった。いやでも、土の香りがただよい、その鼻をつまらせる。また、「ろうそく」の明かりと同調して、いささか不気味な雰囲気を作り出しており、教授はそれが耐えきれぬと見えて、照らし出す明かりが震えていた。

しかし、その明かりの震えに気がつくものはいなかった。それだけが、この恐怖と極度の緊張にとらわれて、そんな明かりの震えに気がつくすぎがなかったのである。

そう、それだけの緊張が彼らの間を隙間なく走っていた。このとき、明確な説は教授の出した墓場説だけだったから、この先には幽霊がいるという考えが、ほかの二人や教授自信、富浦にも少なからずその説の偏見にとらわれていたからである。

と、突然、彼らの視界が開けるかの如く、部屋のような場所に出た。相変わらず土で形成されており、雰囲気こそ変わってはいなかったが、幅が広くなり、彼らが一列に横になることができた。

その部屋にあるのは、地下道入り口にあった石碑と同じようなも

ので、それ以外には何もなかった。その石碑は入り口の石碑と比べて、真新しさを誇っており、土の汚れがついている程度で、石碑に書かれていた言葉もすべて読むことができる。

石碑にはこうかかれていた。

「『我が宝、ここに眠らん』」

その言葉が読まれたときの反応は、富浦たちと教授たちでは異なっていた。ただ、各人に共通していたのは、宝が眠っているという驚きだった。

トレジャーハンターである富浦と情報屋の倉知は、宝が眠っていることを知り、喜びに浸ろうとしていた。何かの偶然で、まだ誰にも知られていない　と思われる　宝を見つけることに成功したのだ。けがの功名とはまさにこのことなのである。

一方、弘田教授と手塚は、宝があることには驚きを感じたものの、彼らのように喜びに浸ることはなかった。教授は自説が間違っていたことを恥じ、手塚は彼らとは対照的に落胆せざるを得なかった。なにせ、宝などこの島で持っていない、猫に小判なのだ。

そう、この島で宝は何の効力も持たぬ。

「とにかく、この宝はちゃんと外に運ぶとしようじゃないか」と富浦はいった。「それ、ここを掘るんだ。おそらく、石碑の下に隠されてるぞ。倉知、外に出て掘る道具を探して来い。そら、あんたらも手伝えよ」

「悪いが、私たちは手伝う気はない」と教授はそっけなく答えた。

「宝になど、興味はない。それに、こんな島でそんなものを持っているだけ、無駄なことだ」

「わかってないな、あんたは」富浦は侮蔑を含めた調子でいった。

「脱出するときに持ってけがいい。こんなところまできて、何もなしで帰るのはつまらんからな。それに、どんな宝かは知らぬが、これを売れば高い金になる。それを使えば、さらなる宝探しもできる

」

そこで、富浦ははっと息を呑んだ。自分がいま、いってはいけな

いことをいつてしまったことにすぐ気がついたのだ。

彼は教授と手塚がそれに気がついていないことを望んだが、それはなんの希望も見出さなかった。

「宝探しもできる？」と教授は疑惑の目を彼に向けた。「いったい、どういことだそれは？ お前は私たちと同じことをしている人間ではなかったのか？」

この場をごまかすことはできたらう、と富浦は思った。しかし、疑惑の目を向けられつつ生活することすら、大変なことではない。特に、こんな牢屋の相部屋のような形になっている状態ではなおさらだ。疑惑の目を向けられたまま生活するのに、慣れている彼とはいえ、さすがにこの状況ではまずかった。

そこで、彼は、自分がトレジャーハンターであるということを、教授と手塚に打ち明けた。

「とんだやつが紛れ込んでいたものだ！」教授は憤慨した。「まったく、こんなやつと生活していたと思うと、腹の虫が収まらん」

「どうとでもいえ。おれは、宝を見つけることで生計を立ててるんだ。あんたみたいな裕福な人間じゃないんだよ」

「じゃあ、お前は何か。あの伝説の調査についても、宝を探していたというのか？」

「そうだとも。それで何が悪い。あんたが、のこのことあんなところに来たから、協力する形で宝を手に入れようという魂胆で何が悪い。どうせ、あんたは伝説にしか興味が無いんだろう？ だったら、宝をもらったところで何の支障もきたすまい。それに、おれだって、その調査に手を貸したんだ。それぐらいの礼をもらってもよかったはずだ。あんたに、とやかくいわれるつもりはないね」

「いくぞ、手塚」と教授。「こんなやつを相手にする必要などない」教授とのすれ違いで、倉知が戻ってきた。倉知はいつたい教授はどうしたのかと、富浦に尋ねると彼はそれまでの事情を打ち明けた。「まあ、仕方ないですよ。いずれわかることでしたしね」倉知は言った。

「まあいい。とにかく、ここにある宝を掘り出すぞ。道具は持ってきたな？」

道具といっても、ただの手ごろなサイズの石だった。原始人が使っていたあの石、そっくりであった。

掘り続けること「ろうそく」三本の消費の末、ついに彼らの目の前に、木箱が現れた。木箱は中ぐらいのサイズで、三個収まっていた。どれもみな、長いことしまっていたからか、木は腐っているようだった。

これでは保存状態はよくないだろうな、と富浦は予測しつつ、その木箱を取り出し、「ろうそく」と共に地上にあがっていった。なにせ、暗いところであるから、もっと明るいところでみたいと思っていたからだった。

それは、倉知にとって緊張の対面だった。初めての宝を前にして、彼はどんな宝が納められているのか期待をして、富浦が箱を開けるのをまっていた。その富浦は、こんな場面は幾度となく体験していたから、緊張するということはなく、いつものように宝をあけるような調子で、そのふたを取った。

そこには、多くの小判と宝石らしき石がたくさん詰め込まれていた。

小判は、何十枚とあり、箱の九割は小判で収められていた。宝石とされているのは、みな黒ずんだような色をしているため、磨きが必要なようで、一部は腐った木の破片だったりしたため、いまその価値はわからぬ。しかし、この小判の数ほどがあれば、いったい何百万円になろう。それを考えるだけでも、倉知はわくわくしていた。

第10話「雨のカーテン」

さて、無人島にある謎の宝を発掘後、富浦と弘田教授の仲にさなるあつれきが生じたことはいうまでもないことだろう。それは、教授が憤慨したことから、予測がつくことなのであるから。ただ、富浦は何もいわなかったし、その点ではいう必要があつたかもしれないが、彼は教授を嫌っていたし、教授もまたそうだった。

そのことに当初は、まったく関係ないと思っていた倉知だったが、後に彼はそれが自分たちの自由を奪う行為であることを悟った。この島からの脱出方法について、適切な意見を述べることができるのは、富浦と教授だけだったからである。倉知と手塚では、彼らほどの頭脳はないから助かる方法は思いついても、規格倒れするのが目にみえていた。

ではいったいどうすればよいのか？

倉知は、それを手塚と話し合った。しかし、手塚は「教授は頑固な方であるので」といって、教授の今の状態を覆すのは難しいという話を話した。倉知は倉知で、短い間だったが、富浦が頑固な性格であることを見抜いていた。

互いに頑固の場合、いったいどうすれば和解できるものだろうと、彼らはため息をつくばかりだった。

そんなある日の朝、天気は曇天だった。重苦しい空気が漂い、富浦はその雲をみて、雨が降ってくることを悟った。

これまでの生活は、すでに三週間たっていた。その間、まだ一度も雨に降られたことのない、彼らの無人島生活。いったい雨が降ると、この島はどうなるのだろう、と富浦は思った。

晴れと雨ではまったく違う場合があることはご承知だろう。その例として、海があげられる。晴れの日として、波は穏やかだが雨の日には荒れている。もちろん、このこと限りでないのが海の気まぐれであるが、平均としてその確率が高いことだろう。

彼は、そのことを家のみなに告げて、早めに食料調達を始めることを提案した。雨の中よりも、降っていない今やったほうが、断然有利だし、病気にもかかりにくくなる。

「なにせ、こんな島じゃ、医者はおるか薬もないんだからな。風邪なんて引いてみる、一番苦しい風邪になるぜ」

食料調達を終えると、富浦の予言どおり雨が、パラパラと降り始めた。まだまだ、小ぶりだったが、彼はこんな雨が降るとは考えておらず、もっと大降りになるだろうと予測していた。しかし、目下のところはこの雨が降り続くことだろう。

雨の日というのは、陰鬱な日であるといわれるが、彼らの状況だとさらに陰鬱になるのだった。ドアの外では雨が降る音が聞こえ、昼間だというのに火をたかねば真っ暗という状況。さらに、富浦と教授のあつれきが、さらに陰鬱さを増大させていた。

それチャンスだとばかりに、倉知は脱出方法について話し合わなしか、と提案した。それには満場一致だったものの、肝心の二人はそれぞれとは話さぬようにしているようで、議論はまったく進まなかった。

やがて、夜が訪れ、雨の音は大きくなりつつ、夜は更けていった。翌朝、倉知は雨の音によって、目を覚まされた。彼はいつたいどれくらいふっているんだと、確認するかのように外をみると、外は雨のカーテンに覆われてほとんど何も見えなかった。見えるものは木の緑色のみ……。

そのことを、続々とほかの者たちも知ることになった。一番驚きを表したのは教授で、こんな雨はみたこともないと感嘆するようになるのである。富浦は、その雨の量に愕然としていた。まさか、ここまで豪雨になるとは思ってもいなかったのだ。

それにこのときには、風も混ざり始め、この島を巨大な台風がとおりぬけているようになっていた。雨の音と風の音が混ざり合い、一種奇妙な音を作り出し、彼らの不安をあおるようだった。

その風によって、家の中についに雨が多く侵食し始め、ドア付近

はもとより、ドアの前の場所は半分までがぬれてしまった。

「この様子じゃ、食料調達にはいけんな」と教授は言った。「今日は飯も飲むものも抜きては、まったくつらいことだ」

「なんだったら、この中をいってもいいんだぜ」と富浦はいった。

「雨の中を行くなといったのは、お前だろう」

「おれはそんなことを言った覚えはない」

「間接的にはいったはずだ」

またもや、この二人の間の悪い空気に、それぞれの隣にいた相方が押さえに入った。ちょうど、彼らは中央で分割して二人ずついたので、向かい合う形でいた。

「しかし、本当にどうしますか、富浦さん」と倉知は言った。「さすがに飲まず食わずで一日を過ごすのはつらいですよ」

「一日ぐらいなら何とかなるだろうよ。人間、耐えようと思えば耐えられる。昔、おれは遭難したことがあって、飲まず食わずを三日三晩続けたことがあるが、いまこのとおりぴんぴんしてる」

「でも、僕は富浦さんみたいに頑丈じゃないですし」

「根性で持たせるんだよ、そこは。とにかく、我慢をすればなんとかなる」

しかし、その我慢は翌日までしか持たなかった。このサバイバルとも呼べる状況で、一日飲まず食わずいたのでは、かなりの体力消耗になってしまったのである。だが、その日も雨は降り続けており、それは雨のカーテンをまだ作り出していた。

「富浦、さすがにこれはまずい」と教授は言った。

富浦は重々しくうなずいた。さすがに、彼も彼の体験でのとくと大分事情が異なっていることを悟り、その体力が持たぬことを知った。とにかく、水は雨で補うこともできるので、それで幾分かは補ったが、さすがに腹の虫がなるのを抑えることはできなかった。

さすがに耐え切れなくなり、手塚が言った。

「食料を少しでもいいから、とって来ませんか？」

「私もそれがいいと思う」と教授は同意を表した。「このままでは、

倒れてしまう。それに、この雨がいつ終わるかもわからないし、体力がまだある今、念のためやっておくべきだ」

「そうだな」と富浦は答えた。「ならば、食料集めと行こうじゃないか。だが、この雨の中行くのは相当大変だろうが」

「その辺は何かなるだろう」と教授。「一体誰がいく？ 全員行くのは、さすがにまずいだろう」

「つかれきっていないおれは行こう。疲れてるやつはいかないほうがいい。風邪を引く原因につながってしまう」

そこで名乗り上げたのが、手塚だった。教授は、自分が行くといっていたが教授が疲れていることは手塚も富浦も知っていた。なぜなら、夜にうめき声を彼が時々上げていたことがあるのを、彼らは聞いていたからだ。そう、教授はあの沈黙の世界にすることが苦しいのである。

教授はついに説得され、雨のカーテンの中、食料調達に行くのは富浦と手塚ということになり、彼ら二人は食料調達へとすぐさま出て行った。

第11話「鉛の雨」

この大雨を表現するのに適切だと思われるのは「鉛の雨」だろう。それは、今まで人類が経験したことがないような重みを持つ雨で、一滴でも触れれば鋭い痛みが走るような感覚に陥ることさえあった。時には、頭を鈍器で殴られたような痛みを感じることもさへも。そう、それは「鉛の雨」ではなく「殺人の雨」といっても、過言ではなかった。

その雨の中を歩くということは、暗闇の中を歩いていると同じことだった。激しい雨が、風にあおられさらに強力になり、彼らに吹きかかるのである。傘なしで、もともと傘があっても何の意味もなさなかっただろうが、歩いている彼らは、その雨が目に入ることは日常茶飯事の段階までできていたのだ。つまり、暗闇の中をさらに暗闇に閉ざされながら歩いているのと同じなのである。

そんな彼らは、手探りでひざを突きながら歩いていた。いわゆる、はいはいである。彼らはいつもの食料調達場へと、自分たちの道の感覚だけで進んでいるのである。それが、この状況でできる唯一の方法だった。

雨はやむどころか、なお激しくなるばかりだった。それに比例するように風も強くなり、彼らの行く手をふさぎ始めた。

手塚はその中で、くじけそうになっていた。もうこんな状況では、前に進むことなどできない。それにこのままでは、家に戻ることもできないと感じたからである。手塚はそれを富浦に伝えようとしたが、雨と風の音でそれはかき消され、富浦の前進をとめなければならなかった。

富浦に手塚の考えが伝わると、富浦はすぐさま却下した。彼は理由をいわなかったが、状況が状況だけに仕方あるまい、と手塚はあきらめるしかなかった。もはや、戻ることもできないのだ……と。

彼らがついに食料調達の場へとやってきたとき、すでに一日以上

たつたように感じられた。彼らは、この場でも手探りで食べられるものを探し出し、風で落とされた木になっている実も手に入れることに成功した。

彼らは撤退を始めた。風雨はさらに強さを増し、さらに彼らにとつて向かい風になっていた。それは、ハワイから日本に戻る飛行機と同じ状態だった。来るときよりも時間がかかる、その風によつて彼らは強い不安を感じた。

その不安が芽生え始めてから葉になったとき、突然、豪雨と強風の音ではありえないバキバキという巨大な音がしたかと思うと、バタンと大きなものが倒れる音が響き渡った。

音はそれっきり、また豪雨と強風の音しか聞こえなくなり、彼らはその音に気にすることなく先に進んだ。しかし、その音の原因は彼らに気にさせる結果になっていた。

倒れたのは木で、彼らの行く道をふさいでしまったのだ。

しかし、富浦はそれにひるむことなく木を越えるため立ち上がったが、彼は元の体制に戻ることを余儀なくされた。

「どうしたんです？」と手塚は尋ねた。もちろん、彼の耳元手だ。

「風があそこだけ大きく吹き通つてるらしい」と富浦は答えた。「風が強すぎて、越えることができない。運の悪いことに、木は太いし簡単にはいかな」

「迂回して行きましょう。木の頭ならこのまま通れますよ」

富浦は同意の印にうなずき、木の頭へと向かった。そして、その場所を通り抜けるとそれから先、彼らの行く手を防ぐものはなかった。

「大丈夫でしょうか、あの二人」

富浦と手塚が、食料調達のために雨のカーテンの中へ消えると、倉知は心配そうにつぶやいた。

「こんな雨だ。確証を持って、大丈夫だとはいえんね」と教授。

「教授は、大丈夫であつてほしくないんですか？」倉知は語気を強

くしていった。

「もちろん、大丈夫であることを祈ってるよ、手塚君も富浦もな。特に、富浦はいやみやつだがこの島を出るには必要な人間だろう。私たちが、この島から脱出するには必要不可欠な人間だよ」

「まるで物みたいない方ですね」

「しかし、君もそう思っているんだろう？」

倉知はうなずくほかなかった。それは、手塚であつてもそうだっただろう。そして、教授もそう思っているのだ。

「あいつは、トレジャーハンターという忌々しい職業だが、逆にそれがこういう場合の打開策を知っているものなんだよ」と教授は言った。「トレジャーハンターという職業柄、さまざまな困難に出会っているだろうし、いまここで生きていたということはそれを取り切ってきたということだろうしな。もつともあいつが　トレジャーハンターとして　善良だったらの話だな」

「富浦さんは善良だと思いますよ。少なくとも僕から見れば、そう思います」

「思う？」教授にとって、その言葉はいささか妙な響きに聞こえたらしい。「思うとはどういうことだね？」

「思うは、思うですよ。文字通りです」

「君はあいつの相棒じゃないのか？」

「相棒？」倉知は鸚鵡返した。「ご冗談を。僕は、富浦さんと一緒に行動しているわけじゃありませんよ。僕は情報屋で、今回特別にあの宝を」　彼は家の隅に丁寧におかれている宝をみた　「探す冒険に連れて行ってもらえないかということで、来ただけなんです。富浦さんとは初めての冒険ですよ。それに、僕自身にとつてもね」

「君は不幸だったわけだ」と教授は哀れむようにいった。

「ところで」倉知は教授の言葉を無視した。「この島から出る方法について、何か教授は名案を思いついたんですか？」

「思いついたら、いまはここにはいないよ。あいつなら何か思いつ

いているかもしれんがな」

「富浦さんも何も思いついてないみたいですよ」と倉知は教えた。

「教授、富浦さんともう一度話しませんか、脱出方法について？」

最近、なにやら話してないみたいですが、このままここにいても仕方ありませんし……」

教授はそれの答えを濁した。教授自信も富浦と話さなければならぬことは承知していた。それを倉知は知ったからこそ、その言葉を発したのだが。そう、教授はトレジャーハンターについてよくは思っていない。しかし、その職業だからこそその打開策を思いつくことは百も承知していたのである。しかし、彼のくだらないプライドでそれを拒んでいたのを、教授はうすうす感じ取り始めていた。

二人の会話は、教授がその後だんまりしてしまったことで、途切れてしまった。倉知はその教授のだんまりが、考えを改めているのだろうと推測して、そのままにしたことも含まれていたが。

そのだんまりによる、沈黙がとかれることになったのは大分先のことである。そのときこそ、雨のカーテンから、富浦と手塚が現れたときだった。

第12話「脱出案の議論」

いうまでもなく、富浦と手塚はびしょぬれである。そんなびしょぬれの彼らの手の中には、食料が納められており、教授はうれしさをあらわしたが、まずは火を付けることが最優先事項だった。

倉知と教授は、それをしておくことをすっかり忘れてしまったのである。ぬれてしまっている彼らは、かなり冷え切っていた。夏とはいえ、さすがにここまでぬれてしまえば、寒いのは当然なのだ。

暖を取ると、彼らは早速食べ物にありついた。腹が完全に満たされたわけではなかったが、大分ましになり、全体の八十パーセント回復といったところだろう。とにかく、彼らは動き足りないといったようなところまで、回復したのである。

「あとは、水がほしいところだ」と教授はばやいた。

「水なら、雨を飲むといい」と富浦。「こんな自然のたくさんある島だ。悪いものではなからう」

「直接飲むというのには、無理があるところだ」教授は指摘した。「だったら、我慢しろ。こちらとて、水がほしいところなんだから」

水というのは、人間に必要なものである。食べ物より水のほうが重要というほど、重要なもので、早々我慢できるものではない。特に砂漠などでは、水をいくら欲しても足りないといったところだが、この彼らの家もまさに砂漠だった。

まあ、砂漠よりは雨がある点からしてましたが、この雨もためるものがないから、多くを得ることはできない。湖の水があるわけだが、この状況ではそこに行くこともできない。

彼らは、そんなこんなで、その日一日、とにかくどうしようもなくなったら、雨から少しでも得ることにして乗り切った。

悪魔のような「鉛の雨」は、ついに小ぶりとなった。それは翌日

のことで、遠くまでも見える普通の雨になったのだ。風は強風ではあったものの、前日の強風よりかは、弱いほうだった。

彼らはこの機会を逃すまいとするかのように、湖まで向かった。雨にぬれようが、それはお構いなしだった。水！とにかく、それが彼らにとって必要なものだった。

湖……………それこそ、彼らの生命線だといっても過言ではないだろう。その彼らの生命線には落書きが施されていた。湖の中に木が倒れこんでいたのだ。木は、一本ではなく三本だった。それ以外にも、強風によって折れた木の枝なども混じりあっており、湖は汚れてしまっていた。

その光景に啞然とした四人だったが、すぐさま気を取り直して、水の透明度をみた。

「完全に透明ではないな」と調べた教授は言った。「もっとも、天気の問題もあるかもしれないが」

「で、結局のめるんですか？」と手塚は尋ねた。

「飲めないことはあるまい。お前はと思う？」教授は富浦に尋ねた。

「この程度なら大丈夫だろう」富浦は答えた。「おれは、もっと汚い水を飲んだこともある。というよりも、日本の水が綺麗過ぎるんだよ。これぐらいでは、ごたごたする必要もないだろうな」

水を十分補給し、食料調達を行った後、彼らはみな言えに戻っていた。まだ雨は降り続けており、外に出ているのには不都合だということもあったが、何より、富浦と教授がこの島からの脱出方法についての議論をするということもあったからだだった。

推理小説の世界では、助手の役割をするものをワトスン役と呼ぶが、まさにこの議論のさなかでの倉知と手塚の役割はワトスンだった。ワトスンは必要不可欠なものである。そのため、みなで議論することとなったのだ。

議論が始まる経緯については、説明するまでもなく、倉知と教授が二人で話したときのことだった。教授のあのだんまりが、この議

論を始めるきつかけを考え出して、この場面を生み出したのだ。

しかし、この議論の場をもちいても、この島から脱出するよい方法は考え出されなかった。まるで、雨がやみ勢いが劣っていくのと比例するように。

第13話「逆漂流案」

「鉛の雨」事件から、二週間が流れた。その間には、ほとんど何もなく、食料調達と議論、就寝の三つのサイクルから成り立っていたようなもので、それ以外のことをすることはあまりなかった。もつとも、主にそのサイクルをしていたのは、富浦と弘田教授で、倉知と手塚はそのサイクルの限りではなかった。

特に、倉知はその議論に参加することはあまりなくて、島内を歩きまわっていた。その間は一人で動いていたため、いったい何をしていたかは誰も知らないが、誰も彼に気をつけるものはいなかった。とはいっても、彼が戻ってきたとき、たまにまだ知らぬ食料を持ってきたりと彼らの影の貢献者であることを手塚のみが知っていた。

とある日、富浦は疲れていた。その日は議論するのを教授に断り、一人で浜辺で水平線を眺めていた。

水平線上に見えるものといえば、雲と海のみである。空は青々として雲ひとつない空と同じく青々とした海の狭間に、鳥一匹すらもない。海の中にいるような感覚に陥ることもしばしばあった。

彼は悩んでもいた。どうやったら、この島から脱出することができるのだろうか？ いったいどうすればいいのか、皆目見当もつかないのだ。彼ほどの経験をつめば、何かしら思いつくものであるが、この島の状況は特殊だった。特殊といえど、小説の中にあるいかだやらなにやらという方法もあるわけだが、それで果たして成功するかといえば、疑わしいものである。

そもそも、冒険小説のようにいかだで脱出するシーンがあるが、いったいどのようなようにしていかだを作るものか、と富浦はいつも思っていた。彼自身の経験によれば、いかだを作る道具というものがまずない。木を倒して、それを加工し組み合わせるなどといった芸当が、道具なしでできよう？

と、彼に話しかけるものがあつた。富浦は後ろを振り向くとそこ

には、倉知が立っていた。

「どうかしたんですか、富浦さん？」と彼は尋ねてきた。

「この島を脱出する方法が皆目見当がつかなくて、頭が痛いんだよ」
富浦は答えた。「教授とあれだけ議論しても、これといった名案は浮かばない。安全に変える方法は、ないのかもしれないな」

「危険な方法ならあるんですか？」

「ないこともないね」

「それはどんな方法で？」

「これについて話すことはやめとくよ。さすがに、これしかないとなるとつらいものがあるからな」

富浦は立ち上がると、倉知に何も言わずに去っていった。いったいどんな考えがあるのだろう、と倉知は考えた。

それから何日もあたたたある日、富浦はまたもや海岸線にいた。しかし、今度いる場所は磯であった。彼はじつと水面上を見ていた。まるで、そこに見えない何かがあるように。

彼が浜辺で倉知とであった日から、この島の脱出方法の議論は相変わらず進んでいなかった。これといった案は出るには出るのだが、それを実行するとなれば確実な安全の保障はないのだ。もつとも、このようなところから脱出する方法として安全の保障をつけるほうが無理な話だが、それでもできる限り安全な方法で、無事に元の世界に戻りたい、というのが彼らの願いである。

彼は磯で一匹の魚を見つけた。その魚は、タイドプールに窮屈そうにしていたので、富浦は慎重にその魚を手に取り、元の海に返した。すると、その魚は水平線のほうへと泳ぎ始め、やがて颯爽とその場から消えていった。

そのとき、彼は唐突に何かに気がつき、磯の周りを調べ、森の中から持ってきた枝を海に流し終わると、思わずニヤリとした。

富浦は、その日の議論は終わっていたが、もう一度やろうと切り出した。

「いったいどうしたんだね、え？」と教授は驚いたように尋ねた。
「何か良案でも浮かんだのかね？」

「良案ってほどじゃないが、この前の議論のときにした案とくつつければいいと思うんだがね」と富浦は答えた。

「この間の案とは？」

「流れに身を任せる方法さ！」

三人は愕然とした。その案は、一番危険な方法として却下された案だったからである。その案というのは富浦が出したもので、それこそ倉知と浜辺で話したときの危険な方法だった。

「それは最後のかけじゃなかったのかね？」と教授。

「そうだとも。しかしねえ、教授。おれはいま重大なことを見つけてきたんだよ。磯から少しはなれたところに潮が流れてるんだよ。それも黒潮がな」

「黒潮？ いったい、それで何をしようというんだ。それにどうして黒潮をわかる？」

「磯で魚を見つけたのさ。名前はなんといったか忘れたが、この時期、黒潮を流れてくる魚だぜ。そんな魚が、タイドプールに引っかかってたんだ。それに、潮がどう流れてたのかも確認してきた」

「それで？」倉知は促した。

「流れに身を任せるというのは、それは助かる見込みが少ないということだった。でも、黒潮に流れればこの時期なわけだし、いずれ漁船に見つかる確率も高いわけだ。一番危険な方法であることに変わりはないが、一番見つかる確率が高い方法でもあるんだよ。そして、この案を実行するにあたって、早めに実行しなければならぬということもある」

「どういう意味ですか？」と手塚は尋ねた。

「漁の時期が終われば、確率が減るということさ。それまでに実行するなら実行しなきゃならない」

「しかしだな、君」と教授はいった。「その案を実行するには、やはり危険が伴いすぎるじゃないか。それに、お前の黒潮の流れの発

見というのが、本当でなかったらどうだというんだ。ここが、ここなのかもわからないのに、黒潮も減ったくれもないし、黒潮の終わりのほうだったらどうする」

「少なくとも前者については答えられる。おれらはいったいどこにいたと思っているんだ？」 彼はここで波に飲み込まれる前にい

た町の県名をあげた 「となれば、おれたちは黒潮に流れてきたというのを考えるのが妥当だろう。その流れの途中で島に漂流したのなら、やはり黒潮の中にいると考えるべきだ。もともと、後者についての意見も考えなければならないが」

「教授」と倉知。「今までの案で一番成功率が高いのは、この案だと思います。まあ、一番成功率が高くて、一番危険率が高いのもこの案ですが、楽して成功するというのは、やはり無理な話なのかも知れませんか」

「それには、わたしも賛成です」と手塚は言った。

教授は考え込んだ。教授はやはり、この案は危険すぎるという点でしり込みしていた。それを察知したのか、富浦はいった。

「もちろん、浮き輪代わりになりそうなもののほかに、食料は持っていますよ。それで重くはなりますが、数日はそれでもたせられるでしょう」

「もし」と教授は深刻だった。「見つからなかったらどうする？」

「そのときはそのときですな。もうこんな楽しみもない島にいても仕方ないでしょう？ だったら、覚悟を決めましょうぜ。この機会を逃したら、もう一年待たなければいけないんだからな。その間に案が出るとはこのままでは思えないし、一年もこんなところにいるのはつらすぎる。そのうち、自殺してしまう気がする」

教授は少し時間をくれといい、家を出て行った。夕暮れ時だったため、彼の後姿はとても暗く見えた。

教授も悩んでいるんだろう、と富浦は推察した。富浦も悩んでいた時期はあった。それに、この案が一番良案であると同時に悪い案であることも彼はわかっていた。これこそまさに運に頼るのだ。し

かし、彼が言ったように、これ以上の案が出るとは思えなかったのだ。

教授の苦悩はそれから翌朝まで続いた。

そして、悩んだ末の結果として、彼はほかの三人に言った。

「その案で行こう」

第14話「実行」

彼らはこの案を逆漂流案またはフロー・ストリーム（潮の流れ）案という呼び方をつけた。というのも、この案を実行するための準備の際、紛らわしくならないためだった。

逆漂流案を実行するための準備というのは至って簡単なものである。まず、漂流する際に浮き輪代わりとして使用する丸太のような木をみつけないければならぬ。もちろん、これは流れるときの体力消費を抑えるためのものであり、彼らの生命線でもある。これがなくなれば、体力の消費は倍に跳ね上がり、やがて海の藻屑となる。

そのほかのものとしては食料である。漂流中いつたい何日たつかわからぬ。その際の食糧確保というわけである。水を持っていきたいのはやまやまであるが、あいにく水を入れるものがないため、それを持つのは不可能な話だった。という、食料はどうするのかといわれるかもしれないが、各人のポケットに入るようなものを持つ。この島の食料は野菜系統の食料がメインだったから、ポケットに入れることが可能であるのだ。

このような準備が完全に終わったのは、二日後だった。

「明日の天気がいければいいんだが」その晩、弘田教授がいった。

「おれは天気がよすぎるのはよくないと思うね」と富浦は反論した。

「晴れだと、日陰がないわけだから、もろに日射を浴びる。となれば、のどもすぐ乾くことになるんだからな。あいにく、水は持てけないんだ。できる限り、のどがかわかない　または飲む、雨か曇りがいいね」

「しかし、それこそ逆漂流案の危険じゃありませんか？」と手塚。

「雨じゃ波が高くなるでしょうし」

「まあそうだが……」富浦は口ごもった。

「で、結局、どっちの天気のおきに行くんですか？　なにも明日じやなきやいけないということではないでしょう？」と倉知は言った。

教授は富浦をみた。富浦は、自分の考えに自信を持っているように、目を輝かせていた。しかし、その輝きは光の輝きのほかに不安げな輝きも混じっているのを教授は見逃さなかった。

そう、富浦も逆漂流案の実行の天気が雨が曇りかでは不安なのだ。彼は心で思っていたのだ。死ぬなら潔く死のう、と。苦しみながら干からびて死ぬより、大波に飲まれて干からびるより少ない苦しみの死に方をしたいと思っていた。それに、後者の考えでは津波に流され、この島に来たときのように、本島に漂着するかもしれないという、望みの薄い希望もあった。

しかし、それを完全に察知したものは一人としていなかった。逆にそれでよかったのだ。富浦がこんな考えを持っているようでは、ほかのものは反発をはじめ、またこの単調なくだらない生活がまっているのだから。

「わかった」と教授はいった。「晴れでなかったら、出発するでしょう。逆漂流案の提案者は富浦だ。提案者の指示に従おうじゃないか」

神様はいつたいわたしたちをどうしようというのだろう、と富浦は思った。

逆漂流案実行日……その日は晴れではなかった。その日は曇りだった。しかし、富浦がみるには、この後には豪雨や強風が来るということが予測された。そう、それはまさしく「鉛の雨」のような……。このとき、風はほとんどなかったし、海は多少荒れていたが危険というほどのものではなかった。いたってそんなことが起こると思えない。しかし、この光景こそまさしく嵐の前の静けさなのだ。富浦はこのことをほかの人物に話さなかった。これ話をしたのは、彼の内心をさらけ出すも同じだったからだ。しかし、教授や倉知、手塚は嵐が起こりそうだということは、うすうす感じていた。

このことを倉知は、それとなく富浦に尋ねてみたものの、富浦はこれといった反応を返さずなかった。

かくして、逆漂流案は実行へと移されることとなった。各人は、

ポケットにそれぞれ食料をつめて、富浦が魚を発見したタイドプールがある磯へ向かった。

波は荒れ気味だった。海は黒く透明さの微塵もなく、まるで「闇の海」のような印象を持たせていた。この海に飛び込むとなると、いささか勇気がいる行動となるほど……闇の中にとらわれるのではないか、という一種の不安さえよぎった。

「行くぞ。とつとといったほうがいい」

富浦はそういうと、浮き輪代わりの丸太と溜め込んだ食料で重くなったズボンを従えて、海に飛び込んだ。それに続いて、弘田教授、倉知、手塚も「闇の海」に飛び込んだ……。

どんどんと島が離れてゆく……。それは期待を抱く彼らの胸に不安を与えた。しかし、希望は与えなかった。できるだけ重たくならないように、軽装をした彼らの服に水がしみこむ。肌に触れる水は冷たく、心までをも冷たくさせていた。前方は重たい雲で覆われてもいる。

彼らはやっこの思いで、潮の流れに乗り込み、体は自然と流されていった。それが、幸運のロードなのか不運のロードなのか、わからないその潮の流れに。

天候はまったく変化を見せなかった。漂流を始めてから一時間が経過した。しかし、彼らには三時間以上がたつたと思われるほどであり、島の形は跡形もなく消え、三六度見渡せば水平線のかなたと重たい雲だけがみえる。ただ、それだけだ。それから何時間たとうとも、その景色は変わらず、ついに雲は見えなくなり、あたりを見渡しても何も見えなくなった。

闇に包まれた海の中で、寝ることはできなかった。気を抜けばおぼれてしまうわけだし、おぼれたとき誰も助けてはくれないのだ。なにせ、真っ暗で一メートル先すらもみえぬという暗闇の中、おぼれている人間をどうやって救出できよう。それ以前に、離れ離れになってしまうという危険すらもあるというのに。

闇の世界にいるという不安や恐れ。睡魔との闘い。溺死の危険性………これらが混ざり合って、彼らに計り知れぬ恐怖をもたらし、翌朝、彼らは精神的に参っていた。それに、夏とはいえど夜中の海の水の中に浸っているのは、寒い。加えて、のどの渇きもある。肉体的にも精神的にも参っていないほうがおかしいといわざるを得ないのだ。

この日の天気は前日と同じであった。しかし、この日は徐々に波が荒れていた。上下左右に揺られながら、彼らは海を流れ、ばらばらになりそうなのを必死で耐えねばならなかった。その耐えるのに、参っている肉体的労働を行い、さらに衰弱して行くという悪循環にも陥っていた。

このとき富浦たちは、しゃべることはおろか考える能力すらも衰えていた。もうこの逆漂流案が、最悪の案であったということすらも考えられなくなっていた。

そう、この案には致命的な欠点があったのだ。肉体的にも精神的にも相当つらいということを彼らは知らなかったのだ。太陽という存在を知っているだけで、太陽の構造については知らなかったのだ。そして、逆漂流案には最大の欠陥がある。富浦は、雨の日か曇りの日がよいといった。しかし、両者とも波の荒れがひどい場合が多い。波がひどいということは、つまり沖に出てくる船も少ないということである。それはいったいどういう意味になるか？ つまり、彼らが船にである確率が下がるということである。彼らの生存率が急激に下がるということである。

そして、その確率がさらに下がり、生存率を急激に下がらせることがいま起ころうとしていた。

ポツンポツンと雨が降り出したのだ。当初は小雨程度だったのが、三十秒後には土砂降りと表現してもよいほどに。当然、海は大荒れになり始めた。彼らは必死になって、ばらばらにならないように気をつけつつ、自分の生存を保ち始めたが、前者を実行するより後者を実行することだけで精一杯だった。

上下左右のゆれは、さらにゆれを大きくさせ、ついに彼らは自らの身長を大きく越えるところまで高い位置に位置するまでに至った。波は彼らを常に攻撃し、時々飲み込むこともしてきた。波による攻撃は、避けることのできぬもので、いくらあがこうがどうしようもないし、その波によって、彼らはだんだんとばらばらになり始めていた。

「こつちだ、手塚！」

教授は必死になって、手塚を自分の下へ戻そうと声を振り絞るようにして出す。手塚はその声に従おうとするものの、波が門番の如くそれを阻止する。次第にその声は波と雨音によってかき消され、手塚に届かなくなるものの、教授は必死に彼を呼び続ける。富浦と倉知は、まったくそんなことはしておらず、かといって距離はどんどん離れてゆく。

やがて、声を出せない状態が続き始めた。波による攻撃の頻度が増え、しゃべることさえ　また、息をすることさえも大変になっていた。このままではまずい……それはみなが思った。この状況下に置かれて、やっと自分たちの状況を見直し始めた。そして、さらに一番聞きたくない言葉が脳裏をよぎる。

そのとき、何メートルかも予測ができない大津波が、彼ら全員目のとまった。それはこちらに向かっており、やがてその波に飲まれることになることを、誰もが予期した。彼らは、その波に飲み込まれないように、波の範囲外に行くが無駄な努力だった。

彼ら全員が大津波に飲み込まれ、各人浮き輪から手を離し、意識を失った……………。

第15話「調査結果……結論」

手塚が目を覚ましたとき、いったい今自分がどうなっているのか理解するのに、頭の回転が始まるまで数秒を要した。そして、起き上がり自分がベッドの上におり、白を基調とした小部屋にすることを理解した。

その部屋には彼ひとりしかいなかった。彼は部屋を見渡して、ここが病院の一室であることを突き止めると、自分がいったい何をしていたのかを思いだしていた。

そうだ、と彼は思いだした。わたしたちは、あの孤島から潮の流れに沿って流れてきたんだ……。

彼ははっとした。ほかの三人はどうしたのだろうか、と。自分は助かったが、あの波に飲み込まれたのだ。彼一人だけしか助かっていないと考えることもできる。彼は早くほかの三人の安否を知りたくて、彼はベッドから起き上がった。

すると、部屋に看護婦が入ってきた。彼女は、彼が起き上がっていることに驚くと、すぐさま医師を呼びに行くといって出てゆくと、すぐさま医師を連れてきて戻ってきた。

医師が、彼の様態をチェックしている間に、彼はほかの三人はどうしたかを尋ねた。

「ほかの三人？」医師は聞き返した。

「わたしと一緒に搬送された人は、いませんでしたか？」

「ああ、いたよ。そのうちの一人は弘田教授でしょう？ あの著名な」

彼はそれをきき、胸をなでおろした。ああ、みんなちゃんと帰還することができたんだ。そう思うと、歓喜せずに入られなかった。

「そうです。ああ、それで教授の様態は？」

「大丈夫ですよ。先ほどのあなたみたいにまだ眠ったままですが」「ほかの二人は？」

「残りのお二方も意識を取り戻されていますよ。富浦さんと倉知さんといいましたかな」

追々知ったことだが、彼の様態チェックが終わると、弘田教授も意識を取り戻した。かくして、四人の職業別々の人物たちは、文明世界へと無事に帰還したのである。

さて、彼らが退院したのはそれから一カ月後のことである。それぞれ同じ日ではなくて、一日や二日のずれこそあったものの、彼は無人島へ行く前のようにすっかり大地を踏みしめて、それぞれの家へと帰宅することとなった。

退院から二週間ほどさらに休養をとった後、富浦は倉知を従えて、また現地へ飛んだ。

彼のその目的は、現地に残した荷物を受け取るというのはおまけで、あの宝について調べるためだった。まだ彼らが入院しているときであつたが、富浦と倉知では先に意識を取り戻したのは、富浦だった。富浦はその体で、倉知の様態やほかの二人の様態を見舞いにいったのだが、そのとき彼の医師がやってきて彼が持っていたものの中に、小判があることを告げた。

その小判が何であつたかはいうまでもなかった。彼はそれを医師の視線がそれたときそつと一個抜き取り、退院後に調べたのである。そして、その調べで彼はひとつの疑問を持った。

それは、あの島で見つけた宝が彼らが求めていた宝であるのではないかと。

これはあまりにばかげている考えだった。しかし、話の中に登場する男が、何日間もつかれきって帰ってきたという。それも海岸へ行つてだ。話にはないが、これがずぶぬれであれば完全に富浦が考えることとは一致する。

その考えがこうである。男は、あの海岸へ行き彼らと同じように大津波に飲み込まれたのではあるまいか？　そして、あの津波は何かしらの現象によって　または季節によるのかもしれない　あ

の島に到着することを知っていたのではないだろうか。あの島は無
人島なわけであるし、宝を隠すことはたわいもないことだ。隠した
のは、念のためであろう。

そして、帰るための条件が数日以上たたなければおとずれなかつ
たので、数日以上の間、姿が確認されずかつ漂流のような形である
から、大変つかれきってしまうのである。

いったいこんな法則がどこから出てきたのか、富浦自信も不思議
だったが、これを発見した男もいかにしてこのような法則を見つけ
出したのか皆目見当もつかない。それに、これはあまりにばかげて
いや、頭がおかしくなったのではないか、というほどの考えで
ある。しかし、事実と彼らの体験があいまるとどうしてもこのよう
な答えが導き出されるのだ。

このばかげた考えの答えを見つけるため、彼は旅の出发点に戻っ
てきたのだった。

しかし、調査を進めても弘田教授が調査していたときのように、
まったく情報は入らなかった。それは幾日も続き、やがてその調査
をするための限度に達していた。そんなときである。彼らが泊まっ
ている旅館に、弘田教授と手塚がやってきたは。

まさかの再会に彼らは驚き、富浦たちは何をしにきたのか、と教
授たちに尋ねると、彼らも富浦とほぼ同じ理由だった。あの伝説の
真相を確かめに来たのだ。富浦は、教授と手塚にあざけられるのを
覚悟で、自分の考えた説を打ち明けてみた。

「まったく、問題にならんね、そんな考えは」話を聞き終わると、
教授が言った。「百パーセント無理な話とはいわんが、さすがに無
理に等しいな」

「しかし、この案以外に考えられることはない」と富浦。「あんた
はどう思う？」

「皆目見当もつかんからここにきたんだ。伝説の調査もそのためだ」
「まあ、せいぜいがんばってくださいや。おれらは、そろそろ退散
しないといけないのでね」

「何か収穫は？」

富浦は首を振った。

富浦たちが東京に戻ってから数週間後、富浦は弘田教授のいる大学を訪れた。これぐらいたてば教授も戻ってきているだろう、と見当をつけて大学に行ったのだが、まさにそのとおりだった。教授はすでに大学に戻っており、講義をしていた。

富浦は教授の講義が終わると、彼に話しかけた。

「悪くないな」講義の感想を富浦は述べた。

「それはどうも」ぶっきらぼうに教授は言った。「それで、今日はなんのようだ？　こんなところにまで、押しかけてきて」

「あんたはあの伝説について調べたんだろう？　調査結果はどうだったのか、聞きにきたただけだ」

「芳しくなかったな」教授は白状した。「しかし、こっちに帰ってきてから、ひとつ判明したことがある。あの町らへんの海流は、季節によって変わるようで、お前の説にぴったりの条件化が一部そろっていることがわかった」

「ということは……？」

「お前の説が正しい可能性もあるということだ。まあ、今現在の解釈がそれしかないのだから、仕方のないことだがな」

「そりゃあ、そうだろうとも」富浦は平然といった。「それだけか？」

「それだけだな。ただ、あのあたりの調査を依頼しておいた。私と共同調査を行うことになった。追々、お前の説が正しいか正しくないかわかることになるだろうよ」

「もちろん、そのときには連絡をくれるだろうね？」

「お前も参加するつもりか？」

「いや、調査結果を教えてくれるだろうな、という意味さ。で、どうなんだ？」

「いいだろう、教えてやる」

と、二人のもとへ手塚がやってきた。手塚は、教授を探していた

ようで、富浦に挨拶をすると教授に用件を言い渡した。

「わかった」と手塚の用件を聞くと教授は言った。「それじゃ、富浦。お前も聞いたとおり、私は失礼することにする」

「じゃ、結果はちゃんと知らせるよう頼むぜ」

富浦はそういうと即席の名刺を作り、それを教授に渡した。教授は、そんなみつともない名刺より数段上等的な名刺を富浦に渡した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4408t/>

孤島の宝

2011年5月21日17時40分発行